

(承前) 忽然ととしか思えない消え方をしてしまった橋浦方人について、生前佐々木史朗がその後について触れた発言を見つけましたので、記しておくことにします。ATGでの三作の後、橋浦方人は記録映画・文化映画に戻り活動を続けているということでした。「橋浦は今ではもう全然違うことをやっちゃってるみたいだけど、それぞれが今も頑張ってるからね。本当にいい監督に出会ってきているよな、と思うよね」と発言しています。

また、先週号でATG発足時のメンバーの一人で『映画の友』編集長であった多賀祥介（東宝宣伝部の出身で松竹映画『拝啓天皇陛下様』（1963 野村芳太郎）のシナリオにも参加）について触れましたが、筆者は先日偶々見る機会を得た、野村芳太郎監督作品『東京湾』（1962）の脚本で多賀祥介の名を発見しました。これも野村芳太郎作品ですね、『拝啓天皇陛下様』同様に。この作品の企画としてクレジットされているのは、佐田啓二です。『東京湾』という作品は、脚本は多賀祥介と松山善三の共作によるオリジナル作品でありカメラは川又昂、音楽は芥川也寸志という後年の『砂の器』（1974）と同一メンバーです。野村芳太郎は、1958年に『張り込み』という傑作を世に出した後、『ゼロの焦点』（1961）といった松本清張作品の映画化に関与する一方で、所謂プログラムピクチャも撮っていました。その中の一本ですが実にスピーディなストーリー展開とリアリズムを重視したカメラワークとで素晴らしい出来に仕上がっています。脚本の丁寧さ、人間観察の洞察力も水準以上です。掘り出し物的作品の発見に大いに楽しみました。この年のキネマ旬報ベストテン選出では26位ですが、点数を入れた三人の評者のうち荻昌弘氏と淀川長治氏の名があったのは驚きでした。こうした作品の発見は何よりも嬉しいものです。

さて、ディレクターズ・カンパニー（通称ディレカン）が設立されたのは、1982年6月のことです。そこには、従来の大手映画会社の制約から自立した映画作家による、作家性と娯楽性を両立した映画製作の拠点として極めて高邁な理想がありました。佐々木史朗がATGの社長に就任し、自らのプロダクションを持たない若手監督たちの足場となるシネマハウスを設立した直後の時期に当たります。このときディレカンとの初めての作品が大森一樹の『ヒポクラテスたち』となります。六甲高校在学中から8mm自主映画制作を続けていた大森は、1975年に『暗くなるまで待てない』を、1978年に『オレンジロード急行』のシナリオが城戸賞を受賞し、同年松竹で学生監督（京都府立医科大学で10年の在学期間を誇る）として監督デヴェウという経歴を持っていました。この『ヒポクラテスたち』から1985年の相米慎二『台風クラブ』まで9本の作品がATG配給として世に送ることとなりました。（9人のディレカンの構成メンバーのATG作品については別表をご参考に）結論から申し上げます、ディレカンは1992年6月に10億円とも言われる債務を抱えて倒産します。一企業として10年という極めて短い期間で姿を消すこととなります。ただ、佐々木史朗ATG社長は、就任時に「ATGをやりはじめてすぐ、新人をどこで探そうかと思って、唯一助監督が張り切っているのが日活だなと思ってね」とここで登場するのが根岸吉太郎でした。というように日活のどうあれ映画を作り続けるという姿勢の重要性が問われることになるのです。また、根岸吉太郎の起用については、岡田裕の次の証言がこのことを裏付けます。「70年代までの”撮影所の時代”は映画がベルトコンベア式に作られていたけれど、これからは一本一本の企画の中身が勝負だ。僕らが作りた映画を作れる時代が来たと、けっこう意気込んでいましたね。佐々木史朗さんは、日活ロマンポルノの助監督をATG作品を撮らせたいと、そこで根岸吉太郎に白羽の矢を立てたんです」と。

ディレカン発足の張本人たる長谷川和彦は、社長に佐々木史朗の就任を依頼することになりますが、さすがに製作と配給との一元的な体制は避けるべくという判断で申し出は断られます。ATGとしてはディレカンは提携する複数のプロダクションの中の一つという認識があったからこそでもあります。ディレカンは、結局のところ社長には博報堂の敏腕営業マン宮坂進をヘッドハントすることになりました。佐々木史朗のATG社長の時代は1986年まで続きますが、日活からの若手監督のみならず神代辰巳（『ミスター・ミセス・ミス・ロンリー』1980）鈴木清順（『ツイゴイネルワイゼン』1981）松竹出身の森崎東（『生きているうちが花なのよ、死んだらそれまでよ党宣言』1985）それから大林宣彦（『転校生』1981 『廃市』1984 『野ゆき山ゆき海べゆき』1986）森田芳光（『家族ゲーム』1983）伊丹十三（『お葬式』1984）寺山修司（『さらば箱船』1984）中川信夫（『怪異談生きてゐる小平次』1982）といった作品を世に送り出すことになり、日本映画界に光明を与えたといっても過言ではないでしょう。

ディレクターズ・カンパニーのメンバーのATG作品とその他主要作品

	氏名	生没年	ATGでの作品	その他の主要作品
1	長谷川和彦	1946~	『青春の殺人者』(1976)	『太陽を盗んだ男』(1979)
2	相米慎二	1948~2001	『台風クラブ』(1985)	『魚影の群れ』(1983) 『あゝ春』(1998) 『風花』(2001)
3	根岸吉太郎	1950~	『遠雷』(1981)	『探偵物語』(1983) 『ヴィヨンの妻』(2009) 『ゆきてかへらぬ』(2025)
4	池田敏春	1952~2010	『人魚伝説』(1984)	『天使のはらわた赤い淫画』(1981)
5	井筒和幸	1952~	『ガキ帝国』(1981)	『のど自慢』(1999) 『ゲロッパ』(2003) 『パッチギ』(2005)
6	高橋伴明	1949~	『TATTOあり』(1982)	『光の雨』(2001) 『夜明けまでバス停で』(2022) 『「桐島です」』(2025)
7	大森一樹	1952~2022	『ヒポクラテスたち』(1980) 『風の歌を聴け』(1981)	『オレンジロード急行』(1978) 『ユー・ガッタ・チャンス』(1985)
8	石井聰互	1957~	『逆噴射家族』(1984)	『狂い咲きサンダーロード』(1980) 『箱男』(2024 岳龍名義)
9	黒沢清	1955~		『ドレミファ娘の血は騒ぐ』(1985) 『CURE』(1997) 『スパイの妻』(2020)